



## 戦地をくぐりぬけたボート部のメダル

東工大の端艇部（ボート部）はオリンピック選手を出しています

新学期が始まって間もない頃（2018.4.9）、博物館の事務室に電話がかかってきました。電話の主は岩野美恵子さんという方で、お父様の遺品を整理していたら、生前とても大事にしていたメダルが出てきたので東工大に寄贈したいという申し出でした。博物館はノーベル賞以外のメダルの寄贈は受けない方針で来ていますので、「申し訳ありませんが、…」と断りかけたのですが、「戦地で形身代わりに預かったものと父が申しておりました物でして…」ということで、電話を受けたスタッフ（丸山桜起 & 佐々木裕子）が出向いて、話を聞くことになりました。伺った内容を確認した上でメモに残すために、ボート部の歴史を調べることになったのですが、その過程で、部員の一人が1928年のアムステルダムオリンピックに派遣されていたことが分かりましたので合わせてお伝えします◆アムステルダムオリンピックといえば、織田幹雄（三段跳び、金）、鶴田義行（200 m 平泳ぎ、金）、人見絹枝（陸上女子 800 m、銀）等の活躍に日本中が湧きかえりましたが、主催者はまさか日本人が優勝するとは思っていなかったようで、表彰式用の日章旗を用意していなかったり、日本国歌の吹奏練習をしていなかったりで、パニックになったそうです。

### 眠りから覚めた記念メダル

岩野さん一家は直接本学とは関係なく、お父様（岩野武蔵）も本学の出身ではありませんが、戦地で本学出身の加藤好雄（1931年〔昭和6〕附属工学専門部 機械科卒）と一緒に行動した関係で、加藤さんが肌身離さず身につけていたボート部の記念メダル（図①）と勤務先（王子製紙苫小牧工場）の同僚たちから贈られた懐中時計を、「俺は生きて帰れるかどうか分からないから」といって先に内地に帰る岩野さんに預けたのだそうです。途中で見つかるかと没収されるので、岩野さんは加藤さんから預かった小さ

なメダル（ペンダント）を石鹼に埋め込んで（石鹼を熱で融解し、メダルを入れた後に再固化して）大事に持ち帰り、帰国後は桐の箱に入れて大切に保管していたそうです。最終的には持ち主だった加藤さんも無事帰還し、二人は再会します。ここで岩野さんは加藤さんにメダルと懐中時計を返そうとするのですが、加藤さんは「俺の分身と思って、そのまま持っていてくれ」というので、メダルと時計（スイスの老舗 TISSOT 製）は岩野さんの手元に残ることになりました。加藤さんは、1997年に86歳で亡くなり、岩野さんも1996年に80年に及ぶ人生を閉じました

ので、今となってはメダルとそれまつわる思い出だけが残されています。美恵子さんは、父が「レニングラードに着いたとき、周りは真っ赤だった」と言っていたことや必死の思いで持ち帰ったシュエバ（毛皮製の防寒用オーバー）を大切にしていたことを鮮明に覚えているそうです。

### 加藤さんの略歴

メダルの持ち主だった加藤さん（1910.6.15～1997.4.3）は、東京都の出身で、本学の前身である東京高等工業学校（高等工業）の最後の学生です。学科は機械科。



① ボート部の記念メダルの裏面にはクルーのポジション・名前・卒業年度が記されている。右：持ち主（加藤好雄<sup>8)</sup>→岩野武蔵→美恵子

高等工業は昭和4年〔1929〕に大学に昇格しましたので、高等工業の2年生になるはずだった加藤さん達は、受け皿として作られた「東京工業大学附属工業専門部」（経過措置、図②）に進級しました。昭和6年〔1931〕に卒業し、王子製紙の苫小牧工場を皮切りに、子会社の日本人絹パルプ株式会社への出向（樺太＝サハリン、敷香工場、図③）を経て、愛知県の春日井工場原資部長、本社建設部製造部長、釧路工場長などを歴任し、東京オリンピックが開かれた1964年には常務取締役・エンジニアリングサービス事業本部長になっています。

加藤さんが所属した王子製紙は、戦後のGHQによる財閥解体（分社化）と後の再統合によって、社名が目まぐるしく変わりますが、基本的には一貫して王子製紙で仕事をしたと考えていいでしょう。加藤さんの履歴を単純にたどると転職の先駆者の人材（転職のプロ）と見誤るので要注意です。加藤さんが戦地でボート部のメダルを託した岩野さんは加藤さんの部下でした。

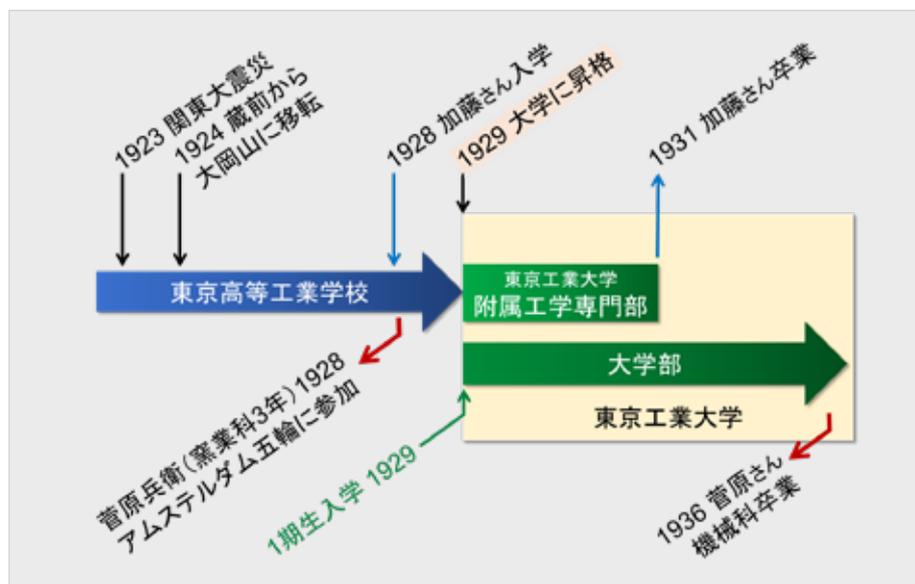
## 古い名簿の威力

最初の電話情報では、名字「加藤」、「ボート部」、卒業時期「昭和初期の1930年前後」という手掛かりしかありませんでしたが、卒業生名簿・卒業アルバム・同窓会誌など<sup>1-6)</sup>を根気良く調べることで、候補者を二人に絞ることができました。そして電話の主にお会いした時に、同窓会名簿に載っていた会社の名前「王子製紙」から加藤好雄さんと同定できたわけです。資料館で仕事をしていますと『名簿』に助けられることが多いのですが、最近では個人情報保護の観点から名簿が姿を消しつつあり、絶滅危惧種と重なるせいでしょいか、複雑な思いに駆られます。

## 卒業アルバムと同窓会誌が もたらした新展開

### オリンピックのボート選手に 選ばれた先輩

同窓会誌の会員消息欄を中心に加藤さんを追跡していた時に、偶然、1928年のオリンピックに派遣される「菅原兵衛」選



② 大学昇格時の組織構成と本稿の主人公の所属（上）と正門に掲げられた看板（下）。右側に「附属工学専門部」の看板が見える。



③ 日本最北の製紙工場だった“日本人絹パルプ敷香工場”<sup>シスカ</sup>。1932年に王子製紙が樺太の敷香に創設。開業（1935年）間もない1937〔昭和12〕年に、加藤さんはここに赴任しています。戦後（日本統治終了後）は、現地のロシア人によって転用され、工場として稼働していたようですが、現在は廃墟と化しています。<sup>9,10)</sup>



④ 1929〔昭和4〕年7月14日からのボート部（学友会端艇部）の合宿に参加した選手やコーチ。参加者リストに“加藤好雄（機二）”，“菅原兵衛（先輩）”との記載あり。出典：1930〔昭和5〕年卒業アルバム。

手の紹介記事が載っていました。時期的に「もはや」と思って、卒業アルバムを丁寧に調べてみると、二人が一緒に写っている集合写真が見つかりました（図④）。本学の前身校は隅田川のほとり（蔵前）にあったせいもあって、ボート部は伝統的に強いのですが、当時は一番勢いがあったクラブだったようです。

第9回オリンピックはオランダのアムステルダムで開かれました。昭和3年（1928.7.28～8.12）のことです。菅原兵衛さん（図⑤，現宮城県築館高校出身）は、5月26日（本学の創立記念日）の壮行会の後、5月30日に日本をたち、シベリア鉄道経由で英国に渡っています。英国で事前トレーニング（Henley-on-Thamesで合宿，6/15～7/24，図⑤B）をした後に、7月25日にアムステルダム入りしています。かじ付きフォア\*の試合（図⑤C）は8月2～10日に行われましたが、控え選手として臨んだ最初の試合で負けてしまい、残念ながら菅原さんの出番はありませんでした。現地からの菅原さんの手紙、特に控えに回ったときの心境を吐露した以下の一文はとても他人事とは思えません。スポーツは体よりも心を鍛えるものとさえ思えます。

\*Four-oared shell with coxswain（舵手付きクオドルプル）：チーム編成は7名だが、実際には4名の漕ぎ手と1名の舵手が乗り、残り2名は控えにまわる。

『…補欠の憂き目に会わねばならぬ運命に



⑤ 1928年オランダのアムステルダムで開かれた夏季オリンピックのボート競技に参加した本学の菅原兵衛選手と事前練習場（イギリスのテムズ川上流のヘンリー，B），及び試合会場のスローテン（C）。出典：1928 Summer Olympics official report, p.737.<sup>11)</sup>

なりました。…初めて補欠と言うものの任務の割合苦しいものであると感じたのでございます。でもこの苦しみは、決して外部的なものではございません。未完成な人間程こんな苦しみがあるのでございましょう。…自分の立場は何であつても只皆様の御厚意に報ゆるために、…きっと立派に務めを果たす覚悟でございます。…』<sup>5-7)</sup>

## 長年の謎も水解

本学の博物館には洋風の絵タイルが2枚収蔵されています(図⑥)。菅原兵衛氏寄贈というメモが残されているのですが、詳しい来歴は不明でした。卒業生名簿で、寄贈者の菅原さんは窯業科の学生だったというところまでは辿れたのですが、それ以上のことは分らずじまいで、収蔵庫に眠ったままとなっていました。恐らく、アムステルダムから帰った菅原さんが応援してくれた大学や同窓会の関係者にお礼の品として贈呈したものでしょう。当時は「菅原兵衛」といえば“時の人”でしたから、説明は不要だったのでしょう。しかし、時の経過とともにオリンピック選手であったことが忘れ去られ、陶板上の手書き文字も Marken (オランダの都市)、Holland (オランダ) と確定できずじまいです。貴重な資料には、しつこいぐらいの来歴、特に写真には人物名を記すように心がけたいものです。

菅原さんは帰国後、精神的につらい日々を過ごしたに違いありませんが、それを克服



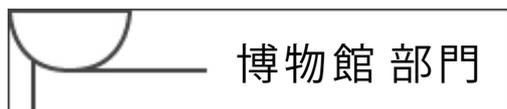
⑥ 菅原兵衛さん寄贈の絵タイル。窯業科の学生だった本人の作品か、オリンピックの土産かは不明ですが、タイルには "Holland" (左) 及び "Marken Holland" (右) と書かれており、かつサイズ(約 12.1×12.1cm) が微妙に違うことから後者の可能性が高いと思われます。オランダの都市マルケンの位置は図⑤ A 参照。

し少し遅れて、附属工学専門部(高等工業の延長, 図②)の窯業科を卒業しています。続いて、新しくスタートした東京工業大学の機械科に入り直して、1936年(昭和11)に卒業し、荏原製作所に就職しました。

## 参考文献

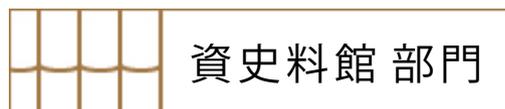
- 1) 蔵前工業会誌第 291 号 (昭和 3 年 4 月 1 日発行) 18 頁, 1928.
- 2) 蔵前工業会誌第 293 号 (昭和 3 年 6 月 1 日発行) 20 頁, 1928.
- 3) 蔵前工業会誌第 294 号 (昭和 3 年 7 月 1 日発行) 24 頁, 1928.
- 4) 蔵前工業会誌第 295 号 (昭和 3 年 8 月 1 日発行) 17-18 頁, 1928.
- 5) 蔵前工業会誌第 296 号 (昭和 3 年 9 月 1 日発行) 15-16 頁, 1928.
- 6) 蔵前工業会誌第 388 号 (昭和 11 年 5 月 1 日発行) 29 頁, 1936.
- 7) 東京工業大学端艇部 100 年史 (平成 13 年 11 月 28 日発行) 121-122 頁, 2001.
- 8) 本州製紙社史, 本州製紙, 1966.2
- 9) <http://hakkaku-culture.info/webmagazine/000128.php>
- 10) <http://hakkaku-culture.info/archive/webmagazine/000129.php>
- 11) The ninth Olympiad being the official report of the Olympic games of 1928 celebrated at Amsterdam issued by the Netherlands Olympic Committee

2019年3月  
発行：博物館 資史料館部門



博物館 部門

東京工業大学 博物館



資史料館 部門

152-8550 東京都 目黒区 大岡山 2-12-1-E3-12 03-5734-3340 centsairy@jim.titech.ac.jp  
<http://www.cent.titech.ac.jp/>

佐藤 勲 (館長, 総括理事・副学長)  
亀井宏行 (教授, 副館長, 博物館部門長)  
広瀬茂久 (特命教授, 資史料館部門長)  
奥山信一 (教授, 兼任)  
金子寛彦 (教授, 兼任)  
野原佳代子 (教授, 兼任)  
大竹尚登 (教授, 兼任)

道家達将 (特命教授)  
棚橋沙由理 (研究員)  
酒井正好 (事務員)  
佐々木裕子 (事務支援員, 学芸員)  
桐明紀子 (事務支援員, 学芸員)  
丸山桜起 (事務支援員)  
渡辺菊乃 (事務支援員, 資史料館)

鎌田祐輔 (事務支援員, 資史料館)  
本間英子 (事務支援員, 資史料館)  
桑原千佳 (事務支援員, 資史料館)  
渋谷真理子 (事務支援員, 資史料館)  
広報・社会連携課 (博物館担当)  
城戸 陽 (課長)  
太田邦之 (社会連携グループ長)

## 追補

本記事で紹介した加藤好雄さんの樺太時代に関する追加情報が得られました。偶然 本記事を目にした息子さんと娘さんから手紙が届いたのです。ご家族にとっては、本記事との出会いは驚きだったようですが、当時のことを懐かしく思い出す機会にもなったようです。私たち資史料館関係者にとっても嬉しい驚きでした。

以下に一部引用しておきます：「…父は仕事、会社の事はほとんど話すことがなかったのでご参考になることは少ないのですが、父を取り上げていただいた感謝の気持ちを込めて、当時の思い出を少々話したい気持ちとなりました。…メモ帳 No. 13 の冒頭に記載のある懐中時計は、父の樺太（カラフト）への転勤に際しての餞別でしょう、ちょっと耳にしたことがあります。…父の樺太時代は昭和 11 年（1936）～昭和 21 年（1946）の 10 年間でした。昭和 12 年～ 18 年は最北端の町“敷香”の工場で、昭和 10 年に完成した国内最新鋭の設備を稼働させていたとの事です。多分、未開発の地で操業し生産する事が国の方針であったので、父は兵役を免れたと思われる。昭和 20 年 8 月にソ連の管理者が来た時、設備等の技術レベルの高さに驚き、感心したとの事です。ソ連もそのまま操業を続けたく、父は昭和 21 年（1946）12 月まで技術的な事を 乗り込んできたソ連人に教育したとの話は聞いています。教育と言っても立場は相手が上ですから大変だったようです。

余談ですが敷香は岡田嘉子（1902～1992）という有名女優が昭和 12 年に恋人と歩いて国境を越えソ連に逃げたという所ですが、年配者か歴史好きでないと忘れられた話ですね。

昭和 19 年（1944）に中央部の豊原に転勤しました。豊原は樺太庁のある最大の町です。ここにも工場がありました。終戦翌日の昭和 20 年 8 月 16 日に運よく家族は引き揚げできました。豊原駅での混雑の中、父が工



⑦ 加藤好雄夫妻（昭和 12〔1937〕年 8 月 4 日）“オタスの杜”にて。夫妻は昭和 10 年〔1935〕末に結婚し、翌年、樺太⑧の敷香⑨に渡った。敷香（しすか、現ポロナイスク）郊外のオタスの杜は日本の行政当局が先住民を集めて居住させた集住地だった。

場からかけつけ家族との別れを惜しみましたが、私の姉が「父さんが泣くのを初めてみた」と言います。当時の我が家は、3 人の子供（もうすぐ 9 歳の長男、以下長女と私）と 6 ヶ月くらいの身重の母の 4 人で引き揚げました。家の物は一つも持てなかったそうです。父が昭和 21 年 12 月で帰れたのも運がよかったと言えます。王子製紙の役員さんでシベリヤに送られ、昭和 26 年（1951）に帰還できた人がいます。シベリヤ送りと言われた時、“あなた方の言う通りに工場を操業し、生産ノルマにも協力したのに何故か”と抵抗してもどうにもなりませんよね。

戦後、分割された王子製紙が 1996 年（平成 8 年）本州製紙と合併して、また大きな王子製紙となったのは父が 86 歳で他界する前年でした。父も感慨深かった事と思います。（頭は最後まで明瞭でした。）

今回の資料に触発され思いつくまま書き述べました。父の他界から 25 年、人生の終盤になってうれしいプレゼントをいただきました。

追補版  
2022 年 3 月